

まえがき

近年、教育改革の勢いは早く、その過程で数多くの新たな施策が具体化されてきている。ここ数年の間にも、第15期中央教育審議会答申、第16期中央教育審議会答申、教育職員養成審議会答申、教育課程審議会答申、文部省「教育改革プログラム」などが相次いで公表され、1998年末から翌99年にかけて学習指導要領が改訂されるなどして、わが国の教育の在り方は大きく変わろうとしている。とりわけ今日の教育改革は、授業時数や教育内容の大幅な削減および「総合的な学習の時間」の創設など教育実践の在り方を変更するにとどまらず、完全学校週五日制の実施や中等教育学校の新設および大学の教育期間の短縮など教育制度そのものに変更を加えようとするもので、それだけに大規模かつ急激な改革だと評されるものである。言うまでもなく、その背景には、完全学校週五日制という喫緊の課題と戦後教育のひずみの是正という課題がある。

この間、各種の実践書の出版や雑誌の特集もみられたが、本書ではそれら出版物の特色を生かしながら教育学の基礎理論を説こうと試みた。言い換えれば、教育の現代的課題をできるだけ重視した概論書が本書なのである。たしかに、教育学概論書は数えきれないほど出版されているが、それらの多くは基礎理論を中心に展開されているため、最新情報に関する解説を極力省いていたように思われる。そこで、本書では、基礎理論と結びつけながら最近の諸答申をはじめとした教育改革の動きにも十分触れようと努めたのである。ここに類書にはみられない本書の特色があるものと考ええる。

ところで、筆者はこの2年間に、学校管理職および現職教師を対象にした雑誌（『教職研修』教育開発研究所）と、これから教師をめざす受験者を対象にした雑誌（『教員養成セミナー』時事通信社）の2誌に記事を連載してきた。前誌では管理職選考問題の解説と添削を担当し、後者の雑誌では全国の教員採用選考問題を分析・解説したが、このふたつの雑誌を担当して改めてわかったことは、管理職選考か採用選考かを問わず実に多くの都道府県で中教審答申を

はじめとする最新の教育改革の動向を取り上げ、重視していることである。つまり、これからの教師には、現在の教育改革の動きを十分に把握しながら、今後の教育の在り方を展望する姿勢と力量が求められているのである。

本書においては、以上のような問題意識から、教育学基礎理論とともに今次教育改革等の現代的課題も取り上げるよう配慮し、書名を『現代教育概論』とした次第である。ただし、現代教育の概論書とはいっても、本書では必要最小限の範囲で歴史的事項も扱った。たとえば、第1章をはじめいくつかの章では若干の歴史的事項についても述べてある。それら記述は教育史の観点からみれば決して十分だとはいえないが、現代の教育課題を考える場合、教育の歴史をさかのぼってみる必要があると思ひ、断片的ながらも歴史的事項について言及することにした。

本書は10章からなり、第1章で教育の本質と目的を取り上げ、以下の章では、教育制度、教育内容と教育課程、教育方法と学習指導、生徒指導、学校経営と学校組織、教職員制度、教育行政と教育法規、生涯学習について論じてあり、そして第10章では現代の子どもをめぐる諸問題を最新データに基づきながら考察している。各章では、当該分野に関する必要事項をできるだけカバーするよう努めたが、これで十分だというつもりは決してない。紙数の関係で割愛せざるを得なかった事項もあり、まだ著者の力量不足から十分言及できなかったところがあるかも知れない。実際、脱稿後にも新たな教育施策が予定されるなどして、校正段階で何度か書き替えたり、書き加えたりした箇所もあるが、それでも漏れがでている可能性はある。それら至らない点については、忌憚のないご意見や暖かいご指導を賜れば幸いである。

なお、本書中の表記についてあらかじめお断わりしておきたい。本書を通して表記に一貫性をもたせるよう努めたつもりであるが、「教師」と「教員」の用語については併用してある。原則として、「教員」の語を用いることとしたが、対児童生徒との関係を記述する個所（たとえば、学習指導等の記述部分）では「教師」としたので、この旨ご承知いただければと思っている。

以上のように、本書は教育改革の急速な進展の最中で刊行されることとなったが、それだけに、これから教師をめざす学生や受験者のテキストとして用いられ、そしてすでに教職にある現職者等の参考図書として活用されることを切

に願っている。

最後に、出版情勢の厳しい中で本書の刊行を認めていただいた学陽書房の社長をはじめとする関係者の方々には御礼申し上げなければならない。とりわけ、著者の遅れがちな原稿を辛抱強くまっていたいただき、かつ原稿を丹念に見ながら適切な助言を与えてくださった学陽書房編集第一部課長の藤谷三枝子氏と同部の鈴木和彦氏には心から感謝申し上げたい。

平成 11 年 3 月 25 日

佐藤 晴雄

改訂版刊行にあたって

本書が平成 11 年に刊行されて以来、数多くの方々に読まれてきたことは、筆者にとって望外の喜びである。しかし、近年、教育改革の勢いはとどまるところを知らず、これまでの教育制度を大幅に変えつつあるため、本書の内容にも一定の手直しが必要になった。そこで、近年の教育改革の動向を新たに盛り込み、同時にデータや資料を更新する形で本書の改訂版を刊行する運びとなったのである。旧版同様に、大学の教職テキストとして、また教師を志望する方々の参考書として活用されることを心より願う次第である。

なお、旧版同様にお世話になった学陽書房の藤谷三枝子氏には心より感謝申し上げます。

平成 15 年 8 月 15 日

佐藤 晴雄

第二次改訂版刊行にあたって

今回の改訂では、教育基本法全面改正及びいわゆる「教育三法」の改正、平成 20 年の学習指導要領改訂などの動きに合わせて、一部書き改めることとした。具体的には、改正された教育基本法の条文にそくして記述を改め、教育三法(学校教育法・地方教育行政の組織及び運営に関する法律・教育職員免許法)の改正によって盛り込まれた学校教員の新たな職の創設(副校長・指導教諭・主幹教諭)、教員免許更新制の導入、学校評価と情報提供の実施、指導力不足教員の対応などの事項を新たに取り上げた。また、学習指導要領の改訂を受けて、その特色についても新たに書き加えたところである。むろん、法改正に関わらない新たな課題についても触れている。

本書は今回の第二次改訂によって通算 8 刷になり、実に多くの読者に読まれてきた。今後も、多くの方々の参考に資するよう最新情報への目配りに努めていきたい。

今回も引き続き、学陽書房編集部の藤谷三枝子氏には、通常の編集業務以外にも重要なアドバイスを数多くいただいたことを、感謝の意を込めて記しておきたい。

平成 20 年 3 月 1 日

佐藤 晴雄

第三次改訂版刊行にあたって

第二次改訂版の刊行から 3 年を経た現在、教育をめぐる情勢は大きく変化してきている。政策はもちろん、学校や子どもをめぐる環境も変わってきた。これらの新たな動きを反映させると同時に、各種データを更新する必要性が生じたことから、ここに第三次改訂版を刊行することとなった。また、巻末には、平成 4 年以降の教育改革の動向をまとめた「教育改革年表」を付してある。

今回の改訂で通算 14 刷になり、この間、実に多くの大学の先生方や教員志望者に活用されてきた。これからも読者の期待に応えるべく、内容の充実を図っていきたいと考えている。編集にあたって、当初から尽力いただいている学陽書房編集部の藤谷三枝子氏には、言葉では表せないほどお世話になった。ここに感謝の意を表したいと思う。

平成 23 年 3 月 15 日

佐藤 晴雄

第四次改訂版刊行にあたって

初版発行の平成 11 年から 18 年が過ぎ、通算 18 刷の長きにわたり多くの方々に本書をご活用いただいたことに、まずは深く感謝申し上げます。直近の改訂からは 6 年経つが、この間にも教育をめぐる改革が矢継ぎ早に行われてきた。義務教育学校が誕生し、「道徳」や小学校の「外国語」が教科化されるなど大きな変化があった。今回の改訂ではそうした動向を踏まえるとともに、学校や児童生徒に関するデータを更新し、最も新しいテキストや参考書としてご活用いただけるよう配慮した。編集には、細かな点にも配慮いただき、筆者

の遅々とした作業にも温かな気持ちで応じてくださった学陽書房編集部の根津佳奈子氏には改めて謝意を表したい。

平成 29 年 2 月 1 日

佐藤 晴雄

第1章

教育の本質と目的19

1 教育の誕生19

1◎人類の誕生と直立二足歩行姿勢の確立 19

2◎文化の蓄積と教育の必要性 20

3◎本能からの解放 21

4◎「形成」から「教育」へ 23

2 教育の概念と目的24

1◎教育の字義 24

2◎教育の目的 27

3 子ども観と教育29

1◎子どもとは何か 29

2◎近代教育思想の子ども観 30

3◎現代の子ども観 32

第2章

公教育制度と現代教育改革35

1 教育制度の原理と構造35

1◎教育制度とは何か 35

2◎公教育の原則 36

3◎学校体系の仕組み 38

2 近代教育制度の成立41

1◎「学制」の教育理念 41

2◎学校令と中央集権的教育制度の確立 42

- 3◎教育勅語の成立と国民道徳思想の形成 44
- 4◎義務教育制度の確立と中等高等教育の整備 45
- 5◎国家主義体制の教育制度 46

3 戦後新教育制度の誕生47

- 1◎占領期の教育改革理念 47
- 2◎教育基本法の誕生 49
- 3◎教育の整備・拡大期 49

4 現代教育改革の方向51

- 1◎臨教審と生涯学習社会 51
- 2◎中教審と「生きる力」を目指す教育改革 53
- 3◎教育改革国民会議以後の教育改革 54
- 4◎教育基本法改正後の教育改革 55
- 5◎教育振興基本計画の策定 56

第3章

教育内容と教育課程の改善63

1 教育内容と教科書63

- 1◎教育内容としての教科書 63
- 2◎教科書の意義 63
- 3◎教科書の歴史 64

2 教育課程の編成原理66

- 1◎教育課程の定義 66
- 2◎教育課程の編成原理の類型 67

3 教育課程と学習指導要領70

- 1◎教育課程の基準としての学習指導要領 70
- 2◎学習指導要領の変遷 71

4	教科課程と教科外課程	73
	1◎教科の定義と内容	73
	2◎特別活動の意義と内容	75
	3◎道徳教育と心の教育の意義	77
	4◎総合的な学習の時間	79
	5◎外国語活動——小学校	80
5	教育課程改善の方向	81
	1◎新しい教育課程改善のポイント	81
	2◎新しい学習指導要領とアクティブ・ラーニング	82
	3◎教育課程と年間授業時数	83
	4◎基礎・基本の重視	85
	5◎学力向上と学習指導要領	86

第4章 教育方法の改善と学習指導の創意工夫89

1	教育方法と学習指導	89
	1◎教育方法とは何か	89
	2◎教育方法の領域と学習指導	90
2	欧米近代教授理論の受容	91
	1◎一斉教授法と開発教授法	91
	2◎ヘルバルト学派の段階教授法	91
	3◎経験主義的学習指導法	92
	4◎「新しい学力観」に基づく新たな教育方法	94
3	学習指導と教授理論	96
	1◎学習指導の原理	96
	2◎教授理論と学習方法	96

4	授業と教育評価	102
	1◎授業の要素	102
	2◎学習者の適性	102
	3◎授業の過程と展開	103
	4◎教育評価の意義と方法	105
5	指導方法の創意工夫と学習条件	108
	1◎「生きる力」と「ゆとり」をめざした指導法の工夫	108
	2◎総合学習と体験学習・問題解決学習	110
	3◎ティーム・ティーチング	111
	4◎情報機器の活用とプログラミング教育	112
	5◎地域教育資源の活用	113

第5章

生徒指導の原理と方法

1	生徒指導の意義	115
	1◎生徒指導とは何か	115
	2◎生徒指導の歴史	118
	3◎生徒指導と学習指導	120
2	生徒指導の原理	121
	1◎生徒指導の方法原理	121
3	生徒指導の内容と方法	122
	1◎生徒指導の内容	122
	2◎生徒指導の方法	125
	3◎懲戒・出席停止	128

4	少年非行と生徒指導	132
	1◎少年非行とは何か	132
	2◎少年非行と学校の危機管理	133
5	進路指導とキャリア教育	134
	1◎生徒指導と進路指導	134
	2◎キャリア教育の背景と意義	135
6	生徒指導の課題	138
	1◎教師の意識変革と資質の向上	138
	2◎生徒指導体制と教育相談の整備・充実	138
	3◎多様な体験活動と児童生徒の参加機会の提供	139
	4◎保護者・地域による苦情・要望への対応	139

第6章

学校経営と学校組織の改善

1	学校経営の意義	142
	1◎学校経営の概念	142
	2◎学校経営の諸領域と機能	144
	3◎学校経営と教育目標	146
2	学級・学年の経営	146
	1◎学級経営の意義	146
	2◎学年経営の意義	149
3	学校組織と校務分掌	150
	1◎学校組織とは何か	150
	2◎校務分掌の意義	151
	3◎校務分掌の組織	152
	4◎校務分掌と教員の役割	154

- 5◎職員会議の性格 155
- 6◎チームとしての学校 157

4 学校評価と学校改善157

- 1◎学校評価の意義 157
- 2◎学校評価の目的と方法 158
- 3◎学校評価の実態 159
- 4◎学校評価の課題 163

5 保護者・地域の学校経営参加164

- 1◎保護者・地域社会と学校経営 164
- 2◎児童生徒・保護者・地域等による経営参加 164
- 3◎学校評議員 165
- 4◎学校運営協議会 166



教職員制度と教員の職務169

1 教職員制度の現状169

- 1◎教職員の種類 169
- 2◎教員の資格と身分 171

2 教員の人事管理172

- 1◎教員の任用と任命権者 172
- 2◎教員の服務 173
- 3◎教員の勤務条件 176
- 4◎身分保障と分限・懲戒 178

3 教員の職務180

- 1◎教育活動と事務業務 180
- 2◎教育活動に係る義務と権限 181

4	教員の力量形成と研修	182
	1◎研修の種類	182
	2◎職務研修（行政研修）	182
	3◎職専免（職務専念義務免除）による研修	184
	4◎自主研修	184
	5◎校内研修	185
	6◎教員免許更新講習	185
5	新たな学校スタッフの誕生	186
	1◎外部人材活用の意義	186
	2◎特別非常勤講師制度	187
	3◎学校支援ボランティア	188
	4◎スクール・カウンセラー	188
	5◎スクール・ソーシャルワーカー	189

第8章 **教育行政と教育法規**

1	教育行政の基本的考え方	191
	1◎教育行政の概念	191
	2◎教育行政の基本原則	192
	3◎教育行政の性格	194
	4◎教育行政の作用	196
2	教育における地方自治	197
	1◎地方自治の本旨	197
	2◎地方公共団体の事務	198
3	教育行政の組織と教育委員会制度	200
	1◎教育行政の組織	200

2◎教育委員会の組織と権限	202
3◎総合教育会議	203
4 教育法規と行政	204
1◎教育法規の概念	204
2◎教育法規の分類	205
3◎法の失効と適用の原則	206
5 教育財政と教育予算	208
1◎教育財政とは何か	208
2◎公教育費支出の根拠	209
3◎教育予算の仕組み	209
4◎国と地方の教育予算の特色	210

第9章 生涯学習社会の学校と社会教育212

1 生涯学習の意義	212
1◎生涯教育から生涯学習へ	212
2◎生涯学習推進施策の展開	214
2 生涯学習と学校教育	217
1◎生涯学習における学校の役割	217
2◎生涯学習の基礎づくり	218
3◎生涯学習機関としての学校	219
3 生涯学習と社会教育	221
1◎生涯学習と社会教育の関係	221
2◎社会教育の定義	222
3◎社会教育の特徴	223
4◎社会教育の内容と方法	224

5◎社会教育職員 226

6◎社会教育施設 227

4 学校教育と社会教育の連携228

1◎学校支援地域本部 228

2◎放課後子供教室 229

第10章

現代の子どもをめぐる諸問題231

1 子どもと放課後231

1◎通塾と家庭学習の実態 231

2◎家庭学習の時間 232

2 子どもの健康と体力233

1◎体格 233

2◎むしばまれつつある現代っ子の体 235

3 子どもと「いじめ」236

1◎いじめの実態 236

2◎いじめの特質 238

4 暴力行為239

5 登校拒否・不登校240

1◎登校拒否・不登校の実態 240

2◎問題解決の鍵 242

教育改革年表243

索引254

教育の本質と目的

1 教育の誕生——なぜ教育が営まれるようになったのか

1◎人類の誕生と直立二足歩行姿勢の確立

なぜ、教育という営みが人間に必要とされるようになったのであろうか。われわれは、その問題すなわち教育の起源を解こうとすると、人類の誕生にまでさかのぼらなければならない。

人類を根拠づける要素をめぐっていくつかの諸説も見られるが、人類の特徴をその頭骨や上顎の形態からとらえる説によるとその起源はおおよそ1,400～1,500万年前となり、二足歩行をその条件だとする説をとればそれは約700万年前だといわれる。また、それをホモ属とみなせば、おおよそ200万年前に人類が誕生したことになる。

ともあれ、有力な学説によると約1,500万年前、アフリカ大陸には多くのサルと類人猿などの霊長類が森に住み、この類人猿は人類に近似した形態の頭骨や上顎をもっていたとされている。しかし、約1,200万年前、大きな地殻変動が起こり、大陸の南北に蛇行する長い谷（大地溝帯）を形成し、大陸を東西に分ける障壁となった。その西側には森が残され、類人猿たちは樹上生活に適した生活を送るようになり、一方の東側は雨が降りにくくなって森林が衰退したため彼らは樹上生活をあきらめて日常生活を地上で過ごすようになったといわれる。荒くいえば、西側で生活したものはサルとして残り、東側で地上生活を

営むようになったものが現代人の祖先へと進化してきたのである。実際、人類最初の化石のほとんどが東アフリカで発見された事実がある。この間に人類は二足歩行を確立してきたと考えられている。

その後、現代人の直接の祖先ともいわれるホモ・エレクトゥス（ホモ属）は約 200 万年前頃に現われ、「火を使用し、生活の重要な要素として狩猟を取り入れ、現代人と同じように走ることができた最初の人類」¹⁾になった。人類は、二足歩行から何百万年もかけてゆっくりと進化し、現代人の祖先に至ったのである。このホモ属は、大きな脳と小さな臼歯をもっていたが、200 万年前にはこの進化系統とは別に、小さな脳と大きな臼歯をもつ系統であるアウストラロピテクス属も存在していた。しかし、アウストラロピテクス属は約 100 万年前に絶滅したと考えられ、したがって、現代の人類に辿り着いたのはホモ属の方だったのである。

2◎文化の蓄積と教育の必要性

こうして現代人の祖先は誕生したが、彼らは直立二足歩行姿勢を確立したおかげで、手でモノを運びながら効率（エネルギー効率）よく移動できるようになるとともに、手（上肢）を用いて道具を製作し使用するようになる。ホモ属は石器（ハンドアックスなど）を製作していたことが明らかであり、それによって肉食文化を築き、「食料探しの場を拡大できただけでなく、子孫を残すチャンスも拡大」²⁾できたのである。つまり、人類は他の動物とは異なり、道具をつくり、それを利用するという文化を形成できたのである。当然、道具は文化の財として地理的に広い範囲に伝播されるとともに、後世に伝承されることとなった。そして、新しい世代はいろいろな地域でそれを発展させながら文化を蓄積してきたのである。

同時に、上肢の解放によって、腕の回転運動が可能になり、指が長くなって手の器用さを増してくると、より複雑な道具（文化財）を製作できるようになった。すると、文化が高度化してくるのである。ハンドアックス（握って使用す

1) リチャード・リーキー著、馬場悠男訳『ヒトはいつから人間になったか』草思社、1996年、p.15。

2) 同書、p.78。

る) 程度を製作していた時代に比べて、現代のわれわれがいかに複雑で高度な道具をつくることができるようになったことか。単に文化財を伝承しただけでなく、それが高度化して伝えられたからである。

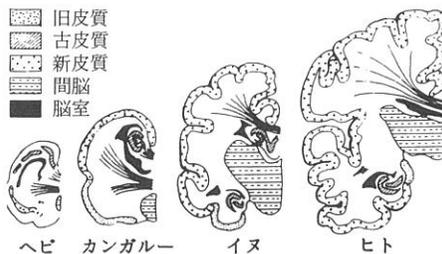
こうして、文化が蓄積され、高度化してくると、それを次世代に伝え、その発展を促す機能が求められてくる。その機能こそが原初的な形態の「教育」であり、その内容は文化財(広い意味での文化財のことで、人間の文化的活動によって生み出されたものという意味)によって形成されてきたのである。

3◎本能からの解放

(1) 大脳の発達

さらに、直立二足歩行姿勢の確立は人類の大脳を他の動物に見られないほど進化させた。つまり、四足歩行動物の場合、脳を首だけで斜めに支えることになるため、その発達が制約されている。たとえば、キリンなどは脳の重さを長すぎる首だけで支えているために、体の割には脳が発達していない。しかし、人類は直立歩行によって大脳を全身で垂直に受けとめることになったので、大脳がある程度重くなってもそれを支えることができる。とくに、新しい脳といわれる、大脳の表面を占める新皮質部が発達して質的な進化を遂げた(下図参照)。古い脳が本能をつかさどるのに対して、大脳新皮質部は、思考、概念操作、記

ヒトの脳の進化



爬虫類と哺乳類の大脳半球の断面 爬虫類には新皮質は形成されていない。ヒトの大脳半球のほとんどすべては新皮質からできているが、有袋類のカンガルーでは新皮質の割合はそれほどでもない。

(資料) 瀬戸口烈司『「人類の起原」大論争』(講談社、1995年)より引用。

憶などに関する機能をもち、いわば後天的な情報を貯え、操作する役割をもつ部分である。

この新しい脳が発達したことにより、人類は後天的な情報を蓄えることが可能になり、本能の束縛から解放され自由に行動できるようになる。動物の中でも、昆虫や魚類など新しい脳が発達していない生きものは、ほとんど本能的な行動しかできないので、しつけがきわめて困難である。むしろ、サルや犬など新しい脳が比較的発達した動物にある程度のしつけが可能なのは、本能からある程度自由だからである。とりわけ人類は、直立歩行姿勢により視線が高くなったため視野が広くなり、その結果、より高次な思考を可能にする条件を獲得してきたのである。

実際、200万年前のホモ属は、われわれと同様の脳をすでにもっていたようである。ホモエレクトゥスは、「複雑な発声を可能にする器官を十分に備え」、「協同の狩猟や炉辺での憩いなどを通じて次第に言語を発達させていった」と推測されている³⁾。そして、原人と現代人をつなぐ中間形態である20万年前のネアンデルタール人に至ると、その脳の容量はすでに現代人にかなり迫っていたといわれ、それ以来、現在に至るまで脳の容量はそれほど増加していないようである⁴⁾。

(2) 本能の弱体化と教育の可能性

だが、人類は頭部が大きくなったため、完成体として生まれてくるのが困難になった。出産前に完成体ができあがってしまうと母親の産道を通ることができなくなるため、未完成体として出産されるようになり、出生後の養育を不可欠とするに至ったといわれる。世界的な動物学者であるアドルフ・ポルトマンが、「それにしても生まれたての人間は、その姿や行動の点では霊長類のどの種類よりもなんと未成熟なのだろう」と述べて、人間は生後1歳になって真の哺乳類が生まれた段階の発育状況にたどりつく、すなわち「生理的早産」の状態で誕生してくると論じた説にも通じるのである⁵⁾。次頁図をみれば明ら

3) 寺田和夫ほか著『人類学』東海大学出版会、1985年、p.135。

4) 瀬戸口烈司著『「人類の起原」大論争』講談社、1995年、p.159。

5) アドルフ・ポルトマン著、高木正孝訳『人間はどこまで動物か』岩波新書、1961年、pp.58-61。